感謝と反省

日野　幹雄

・優秀な学生達

振り返ってみると、学生達が優秀であったこと、(少ないとは言え、他の研究機関と比べると国内では結構）研究予算・研究環境に恵まれていたことにまず感謝したいと思う。

・大学巨大化－失われ行く大学の良さ

東工大の規模は私が着任した昭和42年当時に比べると、学科数、教官数、学生数、キャンパス面積、そして多分大学予算では２倍以上になっているであろう。東工大の力がそれだけ強くなり、社会に認められ、社会に対する影響と責任が大きくなったのである。しかし、大学が本来持っていた、ゆったりした時間、自由な討議、他分野の方々との接触の機会などが失われて来ているのではないかと思う。

・離れ過ぎている学科間建物

私が当校に移って来た昭和40年代までは、未だ教官数も少なく、他学科の教官との交流も少なくなかった。最近はその機会はほとんど無くなってしまった。北大工学部は一つの建物に全学科が入っている。今度建て替える東大・理学部も全学科を一棟にするという。縁が近い（と一般に考えられている）学科よりも、むしろ遠いと思われている学科の方々との接触の方が刺戟が多いものである。このことは私の個人的経験としてばかりでなく、そのような例をいろいろ聞くことが多い。

・論文数を競う悪弊

研究業績は本来研究内容で評価されるべきもので、一生に一編でも、価値の高い論文を書けば十分なはずである。しかし、そんな良い論文はなかなか出来ないし、専門が細かく分かれた現在では並の論文の業績評価は難しいから、ついつい論文数で自他を評価する傾向が生まれ、論文数競争となる。本当のところ、相当高いレベルの論文を数年に数編程度書けば十分という考えが生まれて良いのではないか。論文の量産に時間を費やすよりは、時間を作り良く考えるほど良い論文が出来るはずである。(「あの人は論文を書かない」というのではなく、「あの人は論文数だけが多い」)

・多過ぎる研究会・シンポジウム

こうした会合は本来は、新しい情報源であり、かつ発想への刺戟源となるはずである。しかし、現在はこれらの回数が多過ぎ、しかも、その度毎に数千字の要旨原稿を作らせられることになるので大変な時間の浪費となる。発表はしない場合でも、身柄を拘束され、時間を割かなければならない。

そこで、ここ３、４年は鎖国主義を採ることにした。お付き合いは最小限にする。特に、助手・大学院の諸君には、私以上に厳格に守ってもらった。彼らの方はむろん喜んだし、その効果が研究業績の向上となって現れたと思う。

（工学部　土木工学科　教授）